病同・秒同

西川かつみ

秋の深まる匂いがした。

雨の降る前の少し湿った甘い匂い、桜の甘みを微かに含んだ春の盛りの匂い、若い頃に友人達と行った盛夏のキャンプで、笑うように吸った雑草の暑い草いきれ。そんなずっと忘れていた匂いの記憶が私の胸に蘇った。

「にゃあ」

秋草の種を顔面と身体いっぱいに付けて愛猫が、肌寒くなった夕風といっしょに帰宅したのだった。私の頬に冷えた鼻先を擦り付けて。乾いた草の種の匂いと、どんな殺生をしたのか、少し生臭い血の匂いをまとって、布団に横たわった私の顔にその枯れ草の匂いごと身体全体を押しつけた。

「抱っこがいいの?」

声をかけながら、小さな可愛い殺戮者の冷えた体を、両手でぎゅっと抱きしめた。

「ぐーっるぐーっる　ぷっしゅ」

返事代わりの鼻水まじりの喉音が、抱っこに満足していることを伝えてくれ、長い一日を布団で過ごした私を、今日、初めて笑顔にしてくれた。

どのくらいそうしていたのか、窓の外で夕方の光が消え、夜の闇がすっかり覆っていた。

「大丈夫だから。ね」

深い意味なくそう語りかけても、ぐーっるぐーっるの喉音を高くしてくれるのが楽しくて、床についてからというもの、私はほぼ毎日、おまじないのようにその言葉をとなえながら彼を撫でた。

「大丈夫。何にも心配ないよ。何があっても、お前はずっとお腹いっぱいご飯が食べられるからね」

そう付け加えると、彼は一瞬、喉音を止め、まん丸い目でじっと私を見上げて、それからすぐに、また今度は少し大きめの喉音を立て始めるのだった。

「おるか～大根間引いたの置いとくぞ。胡麻あえにしたら身体にええぞ」

玄関で声がした。近所のIさん。野菜の作り方を教えてくれた方で、私はIさんのことを勝手に先生と呼んでいた。

「ありがとうございます。先生今行きます」

「無理せんでええ、寒うなってきたから、温うして寝えよ」

「先生、大根の間引き、手伝えなくって、すみません」

「そんなんええ。温くして寝とれよ。大丈夫やから」

大丈夫やからという言葉に涙ぐみそうになりながら、上着をはおり、急いで玄関にまわると先生の姿はもうなかった。車のエンジンをかける音に混じって、外で誰かのひどく咳き込む音が聞こえ、私は思わず、

「先生、大丈夫ですか?」

と叫んだ。玄関の上がり戸の傍に、根っこも土も綺麗にそうじされた大量の大根の間引き菜が玄関灯に輝いていた。

「先生」

玄関戸を勢いよく開けると夜風がどっと吹き込んで来て、私は上着のえりをぎゅっと堅くよせ閉めた。外にはもう誰もいなかった。

「大根は身体に良いみたいね」

主治医が作ってくれた食養生用のメモを見ながら、私は猫に笑いかけた。

「今夜は、間引き菜の胡麻あえと、玄米の焼きめしにしようね」

その日初めての料理らしい料理。台所に立った私のふくらはぎに、猫は嬉しそうに身体を擦り付けた。

「さ、いっしょにご飯しよ」

猫缶をお皿に開けて床に置き、一番低い机に胡麻合えと焼きめしを並べて置いた。たくさん作れた胡麻あえは明日のお弁当にも入れよう。娘の好きなメニューだ。

「先生ありがとう。いただきます」

皿に盛られた猫まんまをハグハグと嬉しそうに食べ始めた猫の頭を撫で、

「いただきます」

ともう一度を手を合わせて箸をとった。

夫と娘は、今日は外で食べるから遅くなると言ってくれた。私が病を得てから家族は家事の量を少しでも減らす方へとがんばってくれていた。布団から出るたびに、家のどこかが掃除され、洗濯や片付けがなされていた。

「幸せだね」

猫に声をかけた。固形物を消化するのに苦戦して、いつもギリギリと差し込むように痛む内臓も、その日は少しましに思えた。

一昨年の秋は、お腹はまだ今ほど痛まなかった。

「新薬が間に合えば、助かる可能性もありますから」
主治医が小さく明るい声で、下をむいたままそう言われた。
どう返事をしてよいかわからず、もじもじと曖昧な笑顔を主治医に向けた時だった。背筋を伸ばし、強い視線で私を見ながら主治医がもう一度口を開いた。
「あなたも分かっているとは思いますが、ステージ4の癌はなおらないんです。すべてはすこしでも延命するための治療となります」
一気に言い終えた主治医の口から、ヒューというため息のような音が響いた。

窓の外の木枯らしが、隙間の多い我が家のどこかでヒューヒューと主治医がもらしたため息に似た音を立てていた。
「あれから二年たったんだねえ」
膝に戻った猫を撫でた。大根の胡麻あえだけを痛む腹をなだめながらどうにか食べ終わると、焼きめしを残そうとラップを手にとった。
「にゃ」
突然、猫がラップを手にした指を軽く、それでも歯形が残る程に噛んだ
「え、食べないとだめって?」
猫も焼きめしが食べたいのかと思い、手のひらに載せて差し出しても口にしようとはしない。その上、焼きめしを載せたその手の別の指を、今度は少し強めに噛んできた。痩せ細ったこの仔を家の側溝で拾った時、他の三匹の兄弟猫達はすでに餓死し、虫がわき始めていたのを思い出した。
「わかった。食べるからもう噛まないで」
猫に見守られながらゆっくりと口にする焼きめしは、思ったほど腹に苦痛を与えなかった。
三十分ほどもかけ完食し、空になった皿を猫に見せた。
「少し、元気が出ました。ありがとう」
先生になのか、猫になのか、小さくお礼を口にすると、猫はさも自分のおかげという風にプシュンと鼻を鳴らした。

十月中旬、木枯らしの吹いた寒い午後、玄関に郵便物をとりに出た玄関先に、大きく育った泥だらけの大根の山がおかれていた。添えられたメモには、
「洗えてなくてすまない。干して保存食にしてください。しばらく入院することになった。畑はお手伝いの人を頼んだから、気にしないでよいです」とあった。
「先生……」
電話をかける手が震えた。ずっとひどい咳をされておられたのだ。気がついていたのに、私はしてもらうばかりで何も返さなかった。どうかひどい病ではありませんように。祈るような気持ちで先生に電話をした。

「肺癌や。でも、薬でおさえてすぐに帰るから。大根は三週間干したら味見したいし、持ってきてくれるか? それまでに治って帰るから」
元気な声で先生は言い切った。私はその言葉を信じるフリをした。
一ヶ月たっても先生は家に帰らなかった。
病院で面会のできないコロナの条件の下、電話で安否を窺う度に、先生は逆に私を元気づけるような話をしてくださった。この土地の性質に合う野菜の種類、苗作り、寒暖差のあるこの地特有の作付けの方法。一通り習ったつもりだったのに、まだまだ知らないことだらけだった。そして電話の最後はいつも、
「畑にでるのは、しっかりご飯が食べられた後だけにしなさい」
「苦しい時も、学問はできるかぎりすること。習気(じっけ)といって、身についた知識はこの世だけでなく、来世でも自分を助けてくれるから」と言われた。
日々、死ぬことの恐怖を抑えきれないでいた私に、自分の心身の声を毎日丁寧に聞き、そして人は遅かれ速かれ死ぬのだから、死ぬということに甘えてはいけないことを、教えてくださった。
最後の仮退院の日、お会いした草に覆われた先生の家の庭で、先生は笑っておられた。

「草が私に刈られないから、幸せそうだ。世の中は上手くできているね。だから、私がいなくなった後、畑が草でぼうぼうになっても、気にしてはいけないよ。」
とカラカラと楽しげに声をあげて笑われ、山を削って開墾された時の事故で指二本だけが残された右手を差し出された。私は両手でその手をにぎった。先生の右手は小さく震えていた。泣くまいと思っていたのに、込み上げる嗚咽を奥歯で噛みつぶした。

お棺の中の先生は、優しく静かな笑顔をされていた。

「いつまで生きられるのだろう」
末期乳がんを得た当初、私は何日も眠れぬ夜を過ごした。自身の心身を痛め、死期を早め、何も良いことを生まないことを頭でわかっていても、苦しむのを止めることができなかった。
先生がおられなかったら、今でも私はその地獄から抜け出せないでいたと思う。
「病同」
「これはびょうどうとよむんだよ。僕の造語でね。病を得て少しは謙虚で深い人間になれたような気がするよ。それにどんな状況でも人の根源的価値は変わらないと心から願い思う。身体を損なった分、見えないけれど心に蓄えられ

たものが増えたような気がする。

それと、今生だけでなく、来世も考えるとね、修行の前払いをしただけかなと思うと、かえって得をしたんじゃないかな。こんなに正々堂々と仕事を休めたのは人生初めてだ。全部病のおかげだからね」

「長生きだろうと、少々早くこの世を去ろうと、今この瞬間を生きているということに違いはないから、同じだねえ」

「秒同だな。ははは」

先生は最後の数週間、いつも言葉を言い終わるとカラカラと本当に楽しそうに笑われた。釣られて私もいつも笑って、幸せな気持ちで会話を終われた。幸せな最後の授業だった。

冬が過ぎ春が来て、私は薬のおかげで散歩ができるようになった。先生の畑だったところは草だらけとなり、かつて山のようにとうもろこしや麦や芋を収穫した跡形も、今は全くなくなっていた。青空の下で、背の高さを越える青々とした草がさわさわと風に揺れていた。

「先生見えますか、草も私も幸せです」

「明日は明日の幸せがあることに感謝いたします」

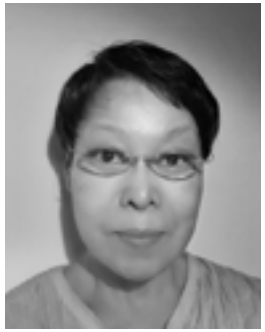
空と大地に私は祈った。

受賞の言葉

西川かつみ

この度は身に余る光栄をいただき、大変ありがたく深く感謝しております。農村で日々の暮らしを細々と営む身に霹靂とも思える病を得て、始めて人生や生きるということを考える機会を与えられました時、このエッセイの募集を知り、自分の心を整理する意味で投稿させていただこうと思うにいたりました。

自分の意に反して、日々衰えてゆく肉体。それでもどんな状況にあっても自分には人として根源的価値があるのだという願いを受賞という形で支えていただいた事、本当にもったいなく、深く感謝しております。思えば人はすべて「死」は確定の事実なのだという当たり前のことに、人生の師であった方に気づかされ、励まされ、今はただ「今日の日」を十分に味わって生きるのみとの思いを心に、一つでも多くを学べたらと前に進む日々です。畑には先日、新しい秋苗を植えました。収穫できましたら、受賞の報告とともに、先生の墓前にそなえたいと思っております。本当にありがとうございます。



西川かつみ

にしかわ　かつみ

京都府立北桑田高校数学教諭

夫と娘と猫二匹で京都府南丹市に住む。京都市より農業を家族で学ぶため、12年前に南丹市に移住。平日は教壇、日曜は家族と畑で過ごす。趣味は農作業と娘に聞かせる物語をつくることと、あんこを食べること。

2019年より乳ガンステージ4サバイバー